

## まえがき

暗くて長いトンネルを抜けると、そこは明るい未来だった

どこかで聞き覚えのあるフレーズだなと思ったあなた、大正解です。小説『雪国』の書きだしを少しもじってしまいました。ごめんなさい。

私は、不登校や引きこもりの子どもや家族が置かれた状況をよくトンネルにたとえます。「お母さん、今は何も見えない真つ暗なトンネルの中にいるよね。どこが出口かわからなくて困っているよね。でも、ここに相談に来てくれたことで、もうすでに一歩も二歩も解決に向かって前進したようなもの。だから安心して一緒に考えていきましょう！」

そうして、母親との面談が進む中で、しだいに変化が表れてきます。カウンセリングを嫌がっていた子どもが面談を受けるようになったり、学習の遅れを取り戻すために学習支援室

にやっ来てたりと。友達と遊びに行けるようにもなりません。そうになると、しめたものです。「お母さん、もう出口が見えてきてるよ。明るい光が見えない？ もうちよつとでトンネルの出口だから、頑張ろうね！」でも、当のお母さんはキョトンとした表情。

人は他人のことはよく見えるし、よくわかるのに、自分のこととなると途端に見えなくなり、わからなくなるようです。だから、第三者である専門家の助けが必要になるわけです。

私たち相談員やカウンセラーは黒子のような存在だと思っています。歌舞伎の舞台で役者さんが華麗に演じているその裏で、役者さんを支えているのが黒子。決して表舞台には顔を出さないけれど、いなければ回っていかない大事な存在。それと同じように、子どもやお父さん、お母さんが主役の舞台で、困難な問題を抱えて紛糾している。そのような家族ドラマを円滑に進行させていくためには、黒子が必要。しかし、事がうまく進行した暁には、その存在は忘れ去られることでしょう。また、そうあらねばならないのが黒子の存在だと言えます。

私が三十六年という長い教師生活でわかったこと。それは、一教師だけではとても解決できないということ。生徒、保護者、学校という複雑に絡み合った問題を解くのは、数学の問題を解くよりも難しいということ。また、ひと昔前と比べ、教師に与えられる仕事は信じられないほどの量があります。教科指導にクラス運営、学年の仕事の分担、校務分掌にクラブの顧問。放課後は、掃除の指導の上に、会議、会議の連続で、一人の生徒とじっくり話す時間などあったものではない。忙しすぎて、生徒の指導どころか、体調を崩してしまう教師が続出しているのが実情です。かくいう私も、実は抑うつ症状が出はじめたために早期退職を決意。心と身体を立て直しての再出発となりました。

今は、相談員として学校と連携を取りつつ、子どもたちが不登校から学校に復帰していくお手伝いをしているという次第です。

子どもたちが成長していく途上には、沢山の人々が関わっています。家族だけではなく、親戚や地域の人々、保育園や幼稚園の先生、学校の先生や事務員さん、用務員さん、学食のおじさん、おばさん。挙げれば数えきれないほどの人々が関わっています。人は人の間で成長

するもの。何か困難に遭遇すれば、誰でも助けてくれます。お父さん、お母さん、みんなと一緒に考えましょう！

解決の方法は必ずあるはず。私たちは全力でサポートします。